# 令和５年度　第２回教育課程編成委員会　要旨

日時：令和５年１１月１６日（木）１０：００～１２：００
場所：国際園芸アカデミー　研修室Ａ（オンライン）

**【あいさつ（今西学長）】**
・平成 30 年に、本校は文科省から職業実践専門課程の認定をいただいたが、本会議はその条件の一つとされたもの。皆様の専門的な見地から意見を伺いながら、実践的カリキュラムを形成していくことを目指すものである。
・限られた時間ではあるが、本校の教育課程について忌憚のないご意見いただきたい。

**【委員会の成立について（小野寺副学長）】**
・委員９名中６名の出席をいただいており、教育課程編成委員会規程第８条第１項により、委員会成立。

**【検討事項（１）：令和５年度前期（新カリキュラム）実施状況について】**
●令和５年度前期　授業評価アンケート結果（資料１～５により説明）

山田委員
・到達目標に対し、学生が自己評価する方法は非常に面白い。数字の高低が気になるところではあるが、「目標設定の文言が明瞭であるか」という点が影響しているのではないか。例えば、「●●の特徴について理解する」といった目標であれば、自分がそのことに関する知識を得たかということを考え、学生は高い点数をつけやすい。評価値が低いものは、やや漠然とした表現のため学生は少し戸惑ってしまい、自分に厳しく評価をしてしまう面があったのではないか。
　「目標設定の文言が明瞭であるか」「学生に対し、授業の初めに意図や目的が十分説明されているか」、この２点が大切であると感じる。この点について、もう一つ工夫があっても良いのではないか。

今西学長
・ご指摘いただいた視点を意識して、来年度に向けて工夫していきたい。

●分野別授業の実施状況（資料６により説明）

小関委員
・生分解性ポットの使用にあたり、最も気になる点はコストと消費者の認知。生分解性ポットは従来ポットと比較してコストが高い。まして、何万ポットという数を扱う場合、「経費」として考えざるを得ない。そういった点まで学んでいただけると良いと思う。
　野菜や果物の消費者は、安全性や SDGs といった考え方が成熟してきてきたが、園芸の消費者は反応がそこまで高くないと感じる。環境に優しいからお金を払うと考えている消費者がどの程度いるのか、非常に関心がある。今後、園芸業界でも環境問題や SDGs のような考えに向かっていって欲しいという

思いも込め、そうした方向性や採算性も含めた部分も教育の中に取り入れていただきたい。
・授業紹介の中にあった、「学園内の花のサブスク」というのは学生発のアイデアなのか。

臼田教授
・教員が実際に花のサブスクを行っており、それを聞いた学生が「こんなこともできるのでは」ということで提案したものである。

小関委員
・サブスクは、自社でも行いたいと考えているがまだ実現できていない。サブスクに限らず、新しいアイデアや、他業界で取組まれている事例はどんどん取り上げていただきたい。生産現場でも販売方法は多種多様になってきており、幅広く対応していく必要があるため、非常に良い取り組みだと感じる。

臼田教授
・生分解性ポットの使用は割高になるが、コスト吸収という点では、個人消費者の方に向けては厳しい部分があるという認識。公園管理など、何万、何十万という単位で植栽をされる場面であれば、ポットを抜く手間が省け、ポット処分の手間やコストも省けるため、そうした場面で価値を見出し活用していく方向性はあると考えている。

稲垣委員
・令和４年度までの「卒業研究・卒業制作Ｉ」と「造園計画演習」を統合し、計画から施工管理までが一貫されたことで、学生にとってはわかりやすく、理解を深めやすいと思う。
・ぎふワールド・ローズガーデン（以下、WRG）では可児造園協同組合が剪定や掃除、刈込み等をボランティアで行っており、アカデミーの学生にも参加いただいている。公園内の作業ということもあり、作業時の安全配慮が非常に大切になってくる。学生も、学校以外の環境での実習は良い体験になるはず。また、アカデミーの学生が WRG に来て作業する際は、挨拶やコミュニケーションが非常に重要になってくる。様々な面で、これから先の仕事をしていく上では、非常に良い経験になってくるだろう。
・2025 年の都市緑化フェアには、県造園緑化協会としても関わらせていただいている。WRG がメイン会場になるため、アカデミーとも手を組み緑化フェアを盛り上げていきたいと考えている。

新井准教授
・地元の造園業者の方と一緒にボランティア活動をさせていただいた際、業者の皆さまの作業速度や正確性に学生は驚いていた。学生にとって大変貴重な経験となっている。

小笠原委員
・生分解性ポットの試験は、非常に良い取り組みである。環境負荷に対する園芸業界の取組みは、生産や物流の現場では耳にするが、消費の場面ではあまり進んでいないという認識。その辺りの部分もやっていかないと、園芸業界の大きな体系の中では、重要部分が抜け落ちてしまう危惧がある。
・新技術に関しては、自社でも AI を積極的に取り入れているが、今後、学生とも新技術の活用について

連携してやっていけたら面白いと思っている。
・授業評価アンケートについては、「先生が学生を評価する」という従来スタイルではなく、「学生が授業に対して評価する」という視点が非常に面白い。

臼田委員
・AI 等の新技術は、模索の段階というところ。我々も社会での実装の様子も含め、勉強を進めながら、授業への反映を進めていきたい。

**【検討事項（２）：WRG おける授業開講について】**

●国際園芸アカデミーの教育環境整備について

農産園芸課　青谷 花き・農業環境対策監（整備の経緯と現在の状況について説明）
・令和元年度から令和２年度に設置された、「国際園芸アカデミー有識者会議」において、「経営感覚に優れた人材育成を行うため、WRG をアカデミーの実習、教育の実践教育のフィールドとして有効に活用し、サテライト機能を有する施設を整備し、実践的な教育を行うこと」と提言された。この提言を踏まえ、WRG 内の花トピアを改修する施設整備方針を検討し、現在、改修工事を進めている。
・改修は 8 月 2 日に着工開始し、来年の 2 月に完了予定。来年の 3 月までに備品等も完備し、今年度中にすべての施設整備を完了するという予定で進めている。

●WRG を活用した授業計画について

臼田教授（資料 7 をもとに説明）
・WRG 活用授業は、令和 5 年度に対して令和 6 年度は約 2 倍の時間数で活用する計画である。各科目の WRG 活用時期と時間数は資料 7 に記載。各科目にとって効果的な時期を勘案した計画となっている。
・WRG で授業を行うことで期待される効果としては、来場者の方の目に触れるため、緊張感を持って授業に臨むことができる点がある。また、来場者の意見、評価を学生にフィードバックすることで、より学修効果を高めることができる。そして、年間 400,000 人が来場する公園における花壇作りや園芸装飾デザインや管理を実践的に学ぶことは、公園管理の仕事についてより理解を深めることができる。

（出席委員からのご意見）
稲垣委員
・公園全体は非常に広いエリア。年間を通した管理方法を学べる意義がある。自社では WRG 内の日本庭園管理を行っているが、様々な技法が使われており勉強になるはず。学生の授業とタイミングを合わせられれば、新たな視点での学びになるかと思うので是非検討いただきたい。

新井准教授
・年間を通じての管理という点をポイントと考えている。公園全体の修景スケジュールに合わせて作業を行っていく点をしっかり学ぶことができれば、非常に有意義な授業になっていくと考えている。

山田委員

・来園者から「見られている」という点が大切だが、偶然学生の実習を目にするのではなく、WRG とアカデミーが一体となり教育を行っていることが常に見える形となるような工夫ができると良い。学生の授業や展示等を行わない時でも、共同の実習の場であることがわかる看板などがあると良いのでは。

・実務的な面では、学生が実際に移動することになるため、移動手段と時間の面で制約が出てくるはずだが、時間割りを作成する上で苦労された点はあるか。

臼田委員

・本校から WRG まで片道 30 分、往復 1 時間の要することになる。例えば、WRG へ行ったら、その日はそこで行う授業とし、移動時間の無駄を減らすような時間割作成も必要になってくるという認識。

・移動方法としては、各自で集合ではなく、バスで本校と WRG を往復する形を検討している。

小関委員

・WRG の活用という面で、我々生産者としては、生産した花苗を実際に公園に植えることができるという点を有効に活かしていただきたい。

例えば、春出荷する苗物は耐暑性がどの程度あるか、いつまで楽しめるかを消費者から聞かれることがある。公園に実際に植栽することで、植物の耐暑性・耐寒性といった特性を確認することが可能である。

また、生産現場では、売り場での見栄えを第一に考えてしまうが、実際は消費者がその後楽しんでいただけるかという点が大切である。そうした視点からの植栽試験も検討いただきたい。

このような深掘りもあると、学生の学びの幅や深みが増すのではないか。

臼田委員

・提案いただいた内容は、現在実施している「課題解決演習」の中のテーマとして非常に適してといる感じた。そういった方向で活用させていただきたいと考えている。

小笠原委員

・学生だけではなく、一般社会人の方もバラを育てたいという方は沢山いらっしゃり、私どもが社内で消費者の方に行っている「鉢で育てるバラ教室」では、お客様がすぐ満席になる。公園を活用して、一般社会人の方がバラを育てるという体験ができるような形に発展していくと面白いかなと思う。

今西学長

・ＷＲＧの施設は改修後も、あくまでも公園の施設であり、公園利用者が使われるというのが大前提。施設整備後も、本校の授業が常に使えるわけではない。今後、農政部と公園関連部局が調整しながら有効に活用していただきたい。

・本校が行っている生涯学習講座のようなものを、今度は指定管理者が今回整備した施設を活用して実施したり、それを本校学生と一緒に実施するなど、様々なパターンが考えられる。是非、完成した施設を、より有効に、より効率的に使えるようにしていきたい。

農園園芸課　青谷 花き・農業環境対策監

・本課としては、花トピア再整備を計画通り完成させるよう、施工業者とやり取りしながら万全に進めていきたい。学生の学修成果がより高まる環境を整えていくことがテーマだと思っている。

・来年度から利用開始されるにあたり、どのような形で進めていくかについては、アカデミーとも調整していきたい。

【講評（古澤顧問)】

・ＷＲＧ活用に向けて動いているが、授業で使う期間は年間のごく一部。指定管理者の方々や、稲垣委員からは茶室のお話もいただいたが、様々な方との協働ができるような形をとり、徐々に実績を重ねて欲しい。また、山田委員からお話しいただいたように、公園が教育機関としても機能しているということが来場者の方々にわかるように、できれば県の外の方にも示せるような形に育て上げていきたい。

【閉会（小野寺副学長)】

・貴重なご意見をいただき感謝申し上げる。今回いただいたご意見を、令和６年度の授業編成に生かしていきたい。